

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520494

研究課題名（和文） 鎌倉幕府の権門寺院政策について

研究課題名（英文） On the policy of the Kamakura Shogunate for the influential temples

研究代表者

平 雅行（TAIRA MASAYUKI）

大阪大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10171399

研究成果の概要（和文）：本研究で私は、鎌倉幕府が宗教政策を二度大きく転換したことを明らかにした。一度目は、1246年の将軍の失脚と北条氏の勝利である。これを契機に顕密仏教への依存が抑制され、それに代わって幕府は禅律僧を重用するようになった。第二は1274年・1281年のモンゴル襲来である。幕府は祈祷の力でモンゴルの侵攻を阻止しようとして、再び密教を重視する政策を採用した。それによって鎌倉の顕密仏教は爆発的な発展を遂げ、鎌倉の僧侶たちはさらに延暦寺・東寺・東大寺など京都周辺の有力寺院に大量進出していった。鎌倉幕府の権門寺院政策も、この政策転換から大きな影響を受けていた。

研究成果の概要（英文）：I wrestled with this research and clarified that there were two major conversions in the religious policy of the Kamakura shogunate. The first conversion occurred in 1246 with the downfall of the shogun and the Hojo family's victory, after which the shogunate became less dependent on the Exoteric-esoteric Schools and appointed monks of the Zen and Ritsu Schools to important positions. The second conversion occurred with the Mongolian Invasions of 1274 and 1281. In an attempt to prevent the foreign invasions by the power of the prayer, the government re-adopted the policy which emphasized the importance of the esoteric Buddhism. As a result of this policy change, the Exoteric-esoteric Schools of Kamakura accomplished an explosive development and the monks of Kamakura moved in a great number to the leading temples around Kyoto, such as Enryakuji, Toji, and Todaiji. The policy of the Kamakura Shogunate for the influential temples took big influence from this religious policy U-turn.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：鎌倉幕府、延暦寺、園城寺、東寺、将軍護持僧、元寇、顕密体制、鶴岡八幡宮

1. 研究開始当初の背景

佐々木馨氏の黒田俊雄批判によって、鎌倉幕府の宗教政策は顕密体制論の成否を左右する論点となった。顕密体制論は京都周辺の寺社勢力を重視するあまり、東日本・鎌倉の仏教界を無視してきたからである。顕密体制論を再構築するには、鎌倉幕府の宗教政策を具体的に解明して、東国仏教界が顕密体制に包摂されていたことを論証する必要がある。

そこで私は、顕密僧の東西往還、鎌倉における顕密仏教の展開、幕府僧の畿内権門寺院への進出、鎌倉幕府の権門寺院政策を明らかにすることによって、鎌倉幕府の宗教政策の特質を解明しようとした。

2. 研究の目的

(1)本研究は、鎌倉幕府による僧侶の人的編成や朝廷補任権への介入を具体的に明らかにすることによって、鎌倉幕府の権門寺院政策の基本的性格とその時期的偏差を解明することを目的とする。

(2)本研究は古代から近世にいたる宗教史を統一的に理解する上でも、重要な貢献を果たすことになる。古代仏教や近世仏教史は僧尼令や寺請制度など、国家の宗教政策を基軸に構築されているが、中世では鎌倉仏教を民衆仏教と捉える学説が主流であったため、宗教政策研究は大幅に遅れた。そしてこのことが、古代から近世にいたる宗教史を統一的に理解することを妨げてきた。私はこれまで朝廷の宗教政策研究を主導的に推進してきたが、ここで鎌倉幕府の宗教政策研究を行うことによって、中世仏教史の重大な欠落を埋めたい。

しかも、鎌倉末期に活動していた幕府僧のうち、幾人かは室町幕府の武家護持僧に転身している。この事実、室町幕府の権門寺院政策が鎌倉幕府のそれとの連続・非連続面を十分勘案したうえで分析されることが必要なことを示している。本研究は、室町幕府論にも資するものである。

(3)顕密僧の官位、および権門寺院の長官補任権はもともと朝廷が掌握していたし、寺内紛争や寺院間紛争の処理も元来は朝廷が管掌していた。それだけに鎌倉幕府の幕府僧編成や、顕密寺院編成は朝廷の権限と抵触する要素を孕んでいる。その意味では、鎌倉幕府の権門寺院政策の研究は朝幕関係の研究でもある。

(4)鎌倉幕府は自由任官・自由昇進を禁じて、御家人が幕府の了解なしに朝廷から直接御恩をうけることを禁止した。この自由昇進の禁止令は幕府の主従制度を根幹で支えていた。ところが幕府は「鎌倉の顕密僧」にも自由昇進を禁じており、その一方で幕府は彼らに寺院所職や荘園諸職を宛行っている。鎌倉幕府による主従制編成は武士にとどまるのではなく、僧侶にまで及んでいる。とすれば、彼らを仏教界の御家人＝「幕府僧」と捉えるべきである。

(5)幕府僧は東国でだけ活動したのではなく、京都に進出して延暦寺・園城寺・東寺・東大寺などの権門寺院長官職に就任している。幕府僧を特定し彼らの活動実態を把握することは、鎌倉幕府の宗教政策を構想する上で、不可欠の前提となる。

3. 研究の方法

この研究課題を達成するには、史料的な制約が非常に大きい。そこで本研究では、鎌倉幕府と人的関係を結んだ僧侶の事蹟を網羅的に追究することによって、幕府の宗教政策を浮かび上がらせようとした。

幕府と人的関係を結んだ僧侶には、①鎌倉の寺院所職や荘園諸職を宛行われて鎌倉幕府と主従関係を取り結んだ幕府僧、②幕府と主従関係を結んでいないが、幕府の政治的支援をうけて主に京都で活動する僧侶、の2種がある。彼らの活動を分析することによって、それぞれの時期の幕府の政策基調を明らかにしようとした。

4. 研究成果

(1)鎌倉に半年以上滞在して宗教活動を行った権僧正以上の僧侶を75名検出した。宗派別の内訳は、東密32名、山門23名、寺門19名、その他1名である。残存史料の偏差を考慮すれば、ほぼ宗派バランスがとれている。なお、興福寺は藤原氏の氏寺であったことや密教が盛んでなかったこともあり、興福寺系の僧侶の鎌倉進出、および幕府僧の興福寺進出は確認できなかった。

(2)権僧正以上の僧侶75名を、時期別にみると、①源氏将軍時代(1180～1219)1名、②将軍頼朝時代(1219～1246)13名、③時頼・時宗時代(1246～1284)9名、④貞時・高時時代(1284～1333)56名となる(活動時期が2期にわたるものは重複してカウントした)。つま

り鎌倉で活動した有力な顕密僧は直線的に増えてゆくのではなく、一度減少したうえで、その後に爆発的に増加している。この変化は、鎌倉幕府の宗教政策に2度の政策転換があったことを物語っている。

より微細にみてみると、①源氏将軍時代に鶴岡八幡宮寺・勝長寿院・永福寺・大慈寺など将軍御願寺の整備がなされたのに対し、②将軍頼朝時代は将軍頼朝と九条家との連携によって、顕密僧の質的充実を図っている。つまり建物の整備から、人の整備へと進化した。しかし北条得宗と将軍頼朝との権力闘争で将軍権力が敗北したため、③時頼・時宗時代は顕密仏教の抑制、禅律僧の保護へと向かった。モンゴル襲来を経た④貞時・高時時代になると、顕密仏教の重要性が再認識され、鎌倉の顕密仏教は爆発的な発展をとげることになった。

近年、鎌倉幕府と禅律僧の結びつきが強調されることが多いが、鎌倉の仏教界の中心はあくまで顕密仏教であり、禅律僧はその補完的存在でしかない。

(3)幕府僧の畿内権門寺院への進出を時期別にみてみると、①源氏将軍時代は0であるのに対し、②将軍頼朝時代は東寺一長者が3名、東寺長者が3名、東大寺別当が2名、大伝法院座主が2名、熊野三山検校が2名など、定豪を中心に東密僧が積極的に畿内権門寺院に進出した。③時頼・時宗時代には園城寺長吏が1名、東寺一長者が3名、東大寺別当が1名、天台座主が1名いるが、1250~81の間は隆弁の園城寺長吏だけである。鎌倉幕府が寺門以外は畿内権門寺院への進出を認めなかったことが分かる。④貞時・高時時代には、天台座主4名、園城寺長吏5名、東寺一長者2名、東寺長者8名、東大寺別当1名、醍醐寺座主2名となっており、主要な畿内権門寺院すべてを幕府僧が席捲している。

(4)鎌倉幕府は幕府僧の京都進出については、概して抑制的である。そのことを明瞭に示すのが定豪の事例である。定豪が就いた畿内権門寺院長官職には、幕府一朝廷の政治関係で任命されたものと、定豪の個人的な野心によって補任されたものがある。いずれについても、幕府僧が畿内権門寺院に進出して勢力拡大を図ることを幕府が積極的に後押ししていたとは言えない。

①承久の乱の恩賞として幕府は定豪を熊野三山検校職・新熊野検校職に吹挙げしたが、定豪の死後は弟子に相続されず、朝廷に返却されている。

②1236年九条道家の要請と幕府の了解により、定豪が東寺一長者に就任することになった。この背後には、延暦寺と佐々木氏との紛争や石清水八幡・興福寺との紛争処理に際し、

幕府が尽力したことに対する朝廷側の謝意がこめられていた。しかし北条時頼段階になると、幕府は東密系幕府僧が東寺長者に就任することを認めなかった。

③定豪は広隆寺別当真禎に接近し、その保護と引き替えに別当職を譲るよう画策したが、幕府はこの別当職讓状を認めなかった。鎌倉幕府の方針と定豪の野心が乖離していたことを明白に示す事例である。

④定豪は承久の乱後に伝法院座主道巖に接近し、その保護と引き替えに座主職を譲るよう画策した。仁和寺御室の政治基盤が揺らいでいたこともあって、定豪は就任に成功し、定豪・定親と相続されるが、北条時頼段階になると、幕府は東密系幕府僧の伝法院座主への就任を認めなかった。

(5)密教僧を再生産する儀礼が伝法灌頂であるが、寺門派の場合は、師弟ともに鎌倉に滞在していても、その伝法灌頂は必ず上洛して園城寺で行っていた。それに対し東密では、1235年ごろから光宝・巖瑜・実賢・憲深・宏教らが鎌倉で伝法灌頂を行っている。中世東密の分権的性格によるものとも考えられるが、史料的制約により中世山門の伝法灌頂の実態が不明であるため、寺門と東密のこの違いが何を意味しているかは、今後の検討課題とせざるをえない。

(6)将軍護持僧は24名を確認した。宗派別の内訳は、東密が7名、山門が7名、寺門が6名、宗派不明が4名である。特に1287年には頼助・公朝・源恵の3名が護持僧であったことが分かる。このうち頼助・公朝は北条氏出身、源恵は将軍子弟(九条頼朝息)出身の僧侶である。貞時・高時時代になると将軍護持僧を北条一門や将軍子弟といった身内で固めることが可能となったことを示している。得宗護持僧は6名いたことが判明しているが、その詳細は不明である。

(7)論文「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶」では、良瑜・光宝・実賢の3名の事蹟を検討し、次の事実を明らかにした。

①安祥寺流の本格的発展は良瑜の鎌倉下向に始まる。鎌倉中後期より、鎌倉安祥寺流と京都安祥寺流は互いに協力しながら顕密仏教界での地位を向上させていった。

②良瑜・光宝とも、その鎌倉行きには定豪が深く関与していた。二人とも京都での居場所を失っていたが、その事情を察知して定豪は彼らを鎌倉に招いた。彼らの鎌倉下向は将軍頼朝一定豪が推進した「鎌倉」仏教界の人的整備策の一環であった。

③道慶の登場によって良瑜は将軍護持体制から押しだされ、帰洛を余儀なくされた。しかしそのために良瑜は、宝治合戦後に鎌倉で

復活することができたのであり、またそれが鎌倉安祥寺流の展開を可能にした。

④光宝・巖瑜・実賢らは鎌倉で初めて伝法灌頂を行った。これにより鎌倉真言派は、京都に依存することなく、密教僧の再生産を自立的に行うことが可能となった。

⑤実賢は醍醐寺出身僧として100年ぶりに東寺一長者に補任された。これは宝治合戦で三浦氏調伏祈禱を行った実賢への恩賞である。

(8)論文「中世仏教における呪術性と合理性」では、北条氏出身の顕宝・時宝について、次の事実を明らかにした。

①1331年8月、倒幕計画が露顕した後醍醐天皇は、京都を出奔し東大寺別当聖尋を頼って南都に逃れた。しかし、東大寺には尊勝院時宝、西室顕宝という北条氏出身の有力者がいたため、後醍醐はすぐさま東大寺を出て笠置山に立てこもった。

②鎌倉幕府が笠置山を攻撃する際、攻撃ルート案内や後醍醐との交渉に顕宝らが活躍した。このように鎌倉末期における幕府僧の畿内進出は、後醍醐の倒幕活動にも大きな影響を及ぼした。

(9)論文「鎌倉期随心院の史料紹介」では新出史料を紹介し、次の事実を明らかにした。

①随心院の創始者である親巖は、鎌倉に赴くことはなかったが、大江広元の近親ということもあり、随心院門跡は鎌倉幕府と密接なつながりをもった。

②将軍頼経の要請で、親巖は弟子の巖海を鎌倉に派遣した。

③随心院における将軍祈禱は巖海一宣巖一巖恵へと継承された。巖恵は鎌倉明王院の別当となり、1266年将軍宗尊の失脚に巻き込まれて遁世するまで将軍護持に従事した。

④随心院巖恵と静巖への継承にかかわる『野沢血脈集』の記事は信憑性が低い。

⑤巖海の弟子である随心院成宣も、一時鎌倉に赴いた。

(10)このほか、原稿化には至っていないが、鎌倉真言派について、次の事実を明らかにした。

①後白河院は源頼朝との提携が実現した1183年10月に、文覚の要請に応じて神護寺に荘園を寄進した。頼朝も間もなく荘園を寄進した。このように文覚は、後白河院と源頼朝との政治的提携の仲介者であった。またそれ故に、文覚・神護寺は頼朝の死後、親幕派を敵視する後鳥羽院によって抑圧されることになる。

②文覚の弟子の性我は頼朝の護持僧となり、勝長寿院別当に補任された。1191年性我は仁和寺守覚法親王から伝法灌頂をうける。この伝法灌頂は将軍護持体制の整備を図った源

頼朝の政治的主導によるものであった。

③執権北条経時の子である頼助は、父の死後、北条時頼の猶子となり、1283年北条出身僧初の鶴岡八幡宮別当、86年北条出身僧初の権僧正、87年北条出身僧初の東寺長者に補任されるなど、鎌倉後期の鎌倉真言派の中心人物となった。1292年には真言大法である仁王経法を勤仕しており、大法勤仕という点で、山門の源恵、寺門の増基と並び称されるべき僧侶である。

④1324年後醍醐天皇が正中の変で倒幕に失敗すると、その翌年に北条出身の有助が初めて東寺一長者・後醍醐天皇護持僧に補任された。

⑤北条氏出身の顕助は1327年正月、後七日御修法を修したが、加持香水の折りには、六波羅探題の武士百余騎を従えた軍事パレードで後醍醐天皇の内裏に向かった。これは、前年暮れから幕府調伏祈禱を行っていた後醍醐に対する軍事的デモンストレーションである。また、鎌倉幕府は後醍醐の周辺を北条出身僧や幕府僧で固めることによって、後醍醐の動きを封じ込めようとした。

(11)論文「鎌倉寺門派の成立と展開」では、鎌倉で活動した主な園城寺出身僧106名の事蹟を明らかにして、次の事実を解明した。

①平氏による園城寺焼き討ちもあって、源氏将軍時代は寺門重視政策がとられた。しかし鶴岡別当円暁・尊暁・定暁をはじめとする幕府僧の質は高くなかった。そのため幕府は、幕府祈禱や堂塔供養では、房覚・公頭・真円・公胤といった京都の有力寺門僧に依存することが多かった。

②1219年、鶴岡別当公暁(寺門)が将軍実朝を暗殺すると、それを契機に幕府は寺門重視政策を転換した。幕府と園城寺との関係は普通の関係となり、四天王寺別当職をめぐる紛争でも幕府は園城寺に冷淡であった。

③将軍護持僧の円親と将軍祈禱に従事した円意とが同一人物であることを解明した。この人物は隆弁の師匠でもあるため、この実証の意義は大きい。一般に『吾妻鏡』の官位記載は相当不正確なため、注意が必要である。

④将軍頼経と北条得宗の対立が激化してきた時期に、将軍祈禱の中核となったのが、頼経の伯父の道慶である。将軍御所の隣には道慶の壇所が造営され、五壇法をはじめとする祈禱を盛んに行った。しかし1246年九条頼経が鎌倉から追放されると、道慶もそれに付き従った。道慶は幕府を後ろ盾にして熊野三山検校に就任したが、帰洛後に解任され、その政治力は急速に衰えた。

⑤1246年、執権北条経時が若くして死没するが、その死は将軍護持僧の呪詛によるものと噂された。その跡を継いだ北条時頼は、隆弁の祈禱で将軍派との権力闘争を乗りきり、

1247年隆弁を終身の鶴岡八幡宮別当に補任した。隆弁への信任は絶大であり、鎌倉幕府の権門寺院政策もその影響を受けて、極端な寺門最良政策をとるようになった。四天王寺別当職や園城寺戒壇をめぐる寺門と山門との争いでは、鎌倉幕府は一方的に園城寺に肩入れしたし、1264年・1268年・1277年には延暦寺の門跡没収を強行するなど、延暦寺と鎌倉幕府・園城寺との関係は緊張に満ちたものとなった。

⑥北条時頼の時代は密教祈祷が低調であったが、1274年・1281年のモンゴル襲来を契機に鎌倉幕府は再び密教振興を図った。その結果、鎌倉の顕密仏教は最盛期を迎えた。幕府僧はさらに園城寺・延暦寺・東寺・東大寺など畿内権門寺院へと進出した。1282年、四天王寺別当職をめぐる園城寺と延暦寺が対立するが、時の園城寺長史は鶴岡別当隆弁であり、延暦寺座主は勝長寿院別当の最源であった。つまり幕府僧のNo1とNo2が園城寺と延暦寺の長官となっていた。幕府はもはやこれまでのような寺門最良政策をとることはできなくなり、権門寺院のバランスを重視した穏当な政策に回帰していった。

⑦鎌倉末期、実相院増基が鎌倉寺門派の中心となり、大法の尊皇王法を修した。山門の源恵、東密の頼助、寺門の増基の三名が、鎌倉の密教を京都に比肩しうる水準へと押し上げた。幕府が崩壊して室町幕府が成立すると、増基たち寺門系幕府僧は室町幕府の武家護持僧に転身した。

⑧花台院定頭は鎌倉後期に鎌倉を訪れ、実清・円重など12名の幕府僧を育成した。

(12)論文「親鸞の配流と奏状」では、鎌倉幕府や朝廷の流人制度と囚人預け置き慣行について検討し、そこから親鸞の流罪生活の実態を推測した。

(13)論文「鎌倉幕府の将軍祈祷に関する一史料」では、1323年将軍守邦の祈祷結番帳を紹介した。そして、そこに登場する24名の僧侶の事蹟を検討し、次の事実を明らかにした。

①この史料は鶴岡八幡宮別当頼仲が1336～41年の間に作成した。訴訟に使用するため房玄が問い合わせ、頼仲がそれに応えて記したものである。一部官位記載に誤りがあるが、全体としてその史料的信憑性はきわめて高い。

②祈祷結番衆24名の宗派別内訳は、東密11名、寺門11名、山門1名、不明が1名である。このうち、北条出身僧は8名にのぼる。結番衆に山門僧が少ない理由は、残念ながらよく分からない。この頃は勝長寿院別当道潤をはじめ、鎌倉山門派の活動がめざましかっただけに、ここでの山門派の少なさはこの時期の「鎌倉」仏教の一般的趨勢を反映したも

のではない。

③結番衆の一人である頼源は、室町幕府が成立すると、永福寺・日輪寺・最勝園寺の供僧職を安堵されたほか、鎌倉の新宮別当職に補任された。

④結番衆の一人である禅秀は北条氏出身であり、鎌倉最末期に東寺長者となった。幕府崩壊後は夢窓疎石の弟子となって碧潭周皎(へきたんしゅうきょう)と名乗り、京都西芳寺や西山地藏院の開山となった。彼は春屋妙葩とは異なり、禅密兼修の立場を貫いた。

⑤鎌倉幕府の安堵奉行であった撰津親鑑は、臨終間近な親玄に、弟子への譲状一括安堵を望むなら、自分の息子鑑厳に久遠寿量院別当職を譲るよう強要した。やむなく親玄は鑑厳に印可を授け、久遠寿量院別当職を譲った。後醍醐天皇の寵妃阿野簾子の姉の面倒をみてきたこともあり、鑑厳は鎌倉幕府が崩壊すると、彼女を伴って上洛し還俗して宮方となって戦ったが、1336年足利方の捕虜となり処刑された。

⑥結番帳作成を依頼した房玄は三浦氏の出身である。親玄の弟子となり久遠寿量院別当職を譲られるはずであったが、鑑厳の横やりで別当職を奪われた。そのため、鎌倉の最末期には上洛して後醍醐方となった。建武政権崩壊後の転身が遅れたため、室町幕府下では不遇であった。久遠寿量院別当職への就任を求め続けたが、結局、補任されることなく終わった。

⑦房玄が幕府護持僧と将軍祈祷結番衆を書き分けていることから、ここに登場する結番衆は将軍護持僧とは別の存在と考えるべきである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- ① 平雅行「中世仏教における呪術性と合理性」、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、157集、2010、pp159-173
- ② 平雅行「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶」、待兼山論叢、査読無、43号、2009、pp1-27
- ③ 平雅行「鎌倉寺門派の成立と展開」、大阪大学大学院文学研究科紀要、査読無、49号、2009、pp111-206
- ④ 平雅行「親鸞の配流と奏状」、『親鸞門流の世界』、法蔵館、査読無、2008、pp175-208
- ⑤ 平雅行「鎌倉期随心院の史料紹介」小野随心院所蔵の文献・図像調査を基盤とする相関的・総合的研究とその展開、査読無、Vol. III、2008、pp52-60

- ⑥ 平雅行「中世史像の変化と鎌倉仏教」、じっきょう、査読無、65号、2007、pp1-5、66号、2008、pp1-5
- ⑦ 平雅行「善鸞義絶状の伝来とその偽作説」、親鸞像の再構築、査読無、1輯、2008、pp57-76
- ⑧ 平雅行「鎌倉幕府の将軍祈祷に関する一史料」、大阪大学大学院文学研究科紀要、査読無、47号、2007、pp1-41
- ⑨ 平雅行「善鸞義絶状と偽作説」、史敏、査読無、3号、2006、pp1-18

〔学会発表〕（計1件）

- ① 平雅行「建永の法難と『教行信証』後序」、第16回真宗大谷派教学大会記念講演、2009年7月5日、大谷大学

〔図書〕（計2件）

- ① 平雅行、他、『日本研究論文集 社会文化史』、ハノイ国家大学附属人文社会科学大学東洋学部日本学科編、世界出版社、2010、pp1-150（ベトナム訳 pp1-189）
- ② 平雅行、他、『世界史を書き直す 日本史を書き直す』、和泉書院、2008、pp1-234

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平 雅行 (TAIRA MASAYUKI)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10171399

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし